

「再暗黒の東京」における光線画技法の適用

マクドゥエル 久美子

松原岩五郎が「最暗黒の東京」を出版した明治 26 年当時は、写実的描写を実践するための方法について様々な試みが行われていた。坪内逍遙が、明治 18 年から翌年にかけて発表した「小説神髓」において、小説における写実的描写の重要性を提唱したことにより、当時の文学界では、写実描写の具体的な実践方法が大きな課題であった。松原は、明治 25 年から 26 年にかけて国民新聞に東京の下層社会の実態を描いたルポルタージュを連載し、翌年これをまとめて「最暗黒の東京」と題して刊行した。ルポルタージュは、小説に増して写実性が要求され、かつ読者の印象に残る鮮明な描写が要求される。そのため、松原は自ら貧民街に潜入し、文明社会から見放され、劣悪な状況に生きる人々の実態を、自己が見聞した内容を基に伝えた。

この作品において、松原は具体的な数値の多用など様々な方法を用いて、貧民窟の写実的描写を追求している。しかし、特に特徴的な試みは、本作品全体において、様々な形で表現されている光と影の対比である。本作品ではそのタイトルが示すように、暗さが貧民窟の非人間的な生活実態を示唆するキーワードとなっている。その対極にある光の示すものはガス灯に象徴される文明であり、資本主義がもたらした富の偏在である。松原は明るさをイメージする言葉を、富や上流階級を示すために用いる一方で、貧民の生活を汚さや寒さ、惨めさを表す言葉よりも、暗さをイメージする言葉を多く用いて、貧民の生活を描写した。また、暗い貧民窟の描写の中に、明るさをイメージする言葉を挿入することで、悲惨な生活状況の中にも、わずかな希望や喜びを見出そうとする人々の強さを表現している。本作品における光と影の対比的な表現方法は、光の明るさから影の暗さを際立たせている、小林清親の光線画の技法の文学的応用と考えられる。松原は絵画的手法を取り入れることで、より視覚的イメージに訴える写実描写を企図したと考える。

Shadows in the Sematic Landscape of Literature: Techniques of Light and Shadow Contrast in *In Darkest Tokyo*

McDowell Kumiko

In Darkest Tokyo, authored by Matsubara Iwagoro, is a work of reportage on poor people living in the slums in Tokyo that was serialized in *Kokumin Shinbun*. He depicted their lives in great detail to document social inequities in “civilized” Tokyo in the early 1890s. In order to vividly illuminate their miserable lives, he employed techniques to draw a clear contrast between the “civilized” world and the lives of poor people in the slums—a technique similar to that of *kōsenga*, which uses contrasts between light and shadow. He used terms indicating darkness to represent miserable and inhumane circumstances while using expressions related to brightness to describe wealth, civilization, and privilege, intending these to be real rather than simply metaphors. This paper argues that the technique of *kōsenga* was thus applied in literature for realistic descriptions, by examining the use of verbal images of light and shadow to illustrate the significant social inequalities observed in the everyday lives of people in the slums.